

渡辺喜美著「対談、総理官邸の機能を強化せよ - 政治の現状と将来を分析する - 」

じゅん刊「世界と日本」内外ニュース 2010年11月1日発行を読む

対談、総理官邸の機能を強化せよ - 政治の現状と将来を分析する

1. 政治家の反射神経が問われる場面

(1) こういうのは政治家の反射神経が問われる場面だと思うんですね。尖閣付近で領海侵犯が日常茶飯事に行われているのは公然の事実でございますが、そのなかで特に悪質な体当たり漁船を取っ捕まえた。じゃあ、逮捕したらどうなるのか。当然こんなことはマニュアル化されてないといけませんよね。そのマニュアルの向こう側にインテリジェンスに基づくいろんな情報分析があって、そして相手がどう出てくるかというシミュレーションも同時に行われてしかるべきでございます。したがって、こういう反射神経の問われる場面で、政府与党も野党もまさに政治家の真価が問われる場面であるという感じがいたします。

(2) 政府の対応をみていますと、例の村木厚子(厚生労働省)元局長の事件のフロッピー改竄^{かいざん}事件で検察が大チョンボをやらかした。その検察に落し前につけるよというような形で責任を取らせたという印象になっているのは非常に残念ですね。こういう時にこそ総理官邸の主がきちんと主導力を発揮して、物事を進めていかなければいけない。結果として日本外交は大敗北を喫したということが言えるかと思えます。だいたい鳩山(由紀夫)さんご自身が8カ月間かかって抑止力というのを勉強されたわけですよ。結局、普天間問題でギクシャクしている結果、付け込まれるスキを与えてしまっている。鳩山内閣の時代は「日米中正三角形」。菅(直人)さんになって口先だけは「日米同盟強化」と言い始めた。でも、普天間一つ取ってみても、これはどうも進みそうにないな、沖縄の人たちは絶対反対だと。民主党のなかからも、辺野古移設なんかできっこないよ、という声が公然と上がっているわけですね。こういう状況のもとで、リチャード・アーミテージ(元米国務副長官)が言うように菅内閣のテストにかかってきたというのが中国の実情^{じつじょう}だと思えるのです。そういうところで白紙で白旗出しちゃった。ほんと情けない話ですね。もうちょっと堪え性があつたってよかったようなものですよ。

(3) 例えばレアアースの禁輸なんていうの、もし本気でそんなことやったら、こんなのはWTO(世界貿易機関)のルール違反そのものでありますから、提訴すれば必ず勝てる話ですよ。それからフジタの社員が4人取っ捕まっちゃった。これだって日本が戦後処理の一環としてODA(政府開発援助)ではなく、遺棄化学兵器の人道支援をやっている。その現場にいる、土木工事の仕事をとりと下見にいったフジタの社員が拘束された。じゃあ、この遺棄化学兵器の処理はしなくていいんですね。これ日本国民の税金でやっている話ですからね。最初は2千億とか言っていたのが、どうも最終的には1兆円以上かかりそうだななんていう話でありますから、本来だったらこういうのは自衛隊を派遣して処理させるのが一番手っ取り早いんですね。でも、中国が自衛

隊は受け入れないというので、民間にやってもらっている話ですよ。ですからこういう人たちをスパイ容疑で逮捕して、しかも死刑にするなんていうことをやったら国際社会から批難ごうごう受けるに決まっているわけですよ。そんなことは考えなくたってわかる話なのに堪え性もなく次から次に二の矢、三の矢が飛んできたら、たまらずに釈放しちゃったという印象を与えますね。

P6 ~ 9

2. 民の人心をつかむ皮膚感覚

(1) 政治家にとって真価が問われるのはやっぱり非常事態なのですね。非常事態を乗り切るためには、冒頭申し上げた反射神経なのです。これがないと政治家は務まりません。この政治家の反射神経を分解して考えますと直感・実感・大局観というものだと思うのです。まず直感、例えばあの漁船の船長を取っ捕まえたら中国はどういう反応をするか。この直感力が必要ですね。次に実感、民のかまどと人心ですよ。今、日本国民の民のかまどはどうなっているのか。中国人民の民のかまどはどうなっているのか。中国では反日運動とか言っているけれど、暴動もあちこち起きていて、反日運動は反政府運動にすぐ転換しそうだ。こういう実感力ですね。人心をつかむ皮膚感覚ですよ。こういうものが絶対必要ですね。民のかまどと人心がわかっていないとはっきり言って政策の厚みが出ませんね。非常に薄っぺらな政策になっちゃいます。だからこの直感・実感、そして最後はやっぱり大局観ですね。日本の政治家というのは日本の歴史と伝統と未来がかかっているわけです。だからわれわれは死せる人々が残してくれたもののなかに答えが書いてあるはずだということを常に考えながら歴史認識を持って、次の未来を考えるわけですね。こういう直感・実感・大局観というのは政治家の反射神経のなかに組み込まれているわけですし、これがない人が国家経営をやると国は滅びますね。

(2) 恥を知れ、というのは政治家だけじゃなくて、人間の基本ですからね。人間の基本法ができてない人が政治家になっちゃったら、それは目も当てられませんよね。自由社会の基本的な倫理というのは力の強い人がやりたい放題やっちゃいけないということなのですね。力の強い人がやりたい放題やる社会は弱肉強食の世の中になっちゃうわけです。だから自由社会では強い人は自己抑制しなさいと。日本の文化で言ったら恥の文化というのがあるわけですね。だから恥を知れというのは当たり前な日本文化なのであって、とにかく権力を持ったら何でもできるんだ。権力を取ったら今まで言ってきたことはガラッと変えるんだと。恥を知れ、と言いたいですね。

P43 ~ 45

3. 軍事力、経済力、政治力、文化力

(1) 中国というのは大陸国家であったのが今、明らかに海洋国家、陸の勢力が海の勢力になってきているということだと思うのです。当然、この背景には軍事力の拡大の裏側に資源の確保、エネルギーの確保という大命題があると思います。だから尖閣もあそこの日本名「白樺」をはじめとしたガス油田も、中国の理屈は揚子江の吐き出す泥のなかにあるものは全部俺たちのものだ。揚子江の泥が堆積して、その泥の堆積の上にある島は俺たちのものだと。こういう大陸棚延伸理

論を使っているようですが、じゃあ、東シナ海の大陸棚延伸を国連の大陸棚限界確定委員会に申請したら認められるかといったら、一発でペケになります。ロシアがベーリング海とか北極海とかの大陸棚延伸を申請してペケになったけれども、それはなぜかといったら、紛争がありますから、紛争のある地域でそんなことをやったら認められるわけがありません。

(2) 一方、日本サイドからすれば尖閣が日本の領土であるというのは歴史的な事実ですから、1895年に内外に宣言しているわけであって、こんなものは全く自明の理で問題ありませんが、結局、中国という国がどういう本質を持っているかが重要だと思うのです。上海万博のパビリオンをみるとわかるのですけれども、ど真ん中に中国館があって、その周辺にアジア諸国のパビリオンがありますね。その一番外れにあるのが日本館、アメリカ館は中国館と一番遠いところにある。これが中国の世界観ですよ。つまり中国はまさにその名の通り世界の文明の中心地域であると。これを中華思想というわけでありまして。こういう中華思想のもとで外交戦略の基本は覇権主義になっていきます。

(3) じゃあ、われわれはどう対応したらいいのかといったら、やっぱりバランス・オブ・パワーなのです。力の均衡でやっていくしかないのです。これは与えられているものではありません。これからつくる課題なのです。力の均衡というのは軍事力だけでいいのかというと、それも違うのです。軍事力も10年前だったら日本のほうがはるかに上だった。でも、海軍力においてはもう相当すごいことになっていますね。だからここで大事なことはやっぱり日米同盟だと。日米同盟はあと10年ぐらいは大丈夫だと私は思っているのですけれども、このレバレッジをいかに活かすかということ。そして島嶼防衛の強化で南西諸島に自衛隊を重点配備をしていく必要があるかと思えます。

(4) そのうえで何で中国がこれだけ軍事力を増強してきたのだといったら、それはやっぱり経済力なのです。経済力がものすごい勢いで伸びてきているわけで、ついこの間まで300兆円だったGDPが名目GDPは今年追いつかれて、追い越されちゃったわけですね。例えてみれば日本人は定期預金を500万円持っているけど、金利はゼロだ。中国人は300万円しか持っていないけれど、金利は複利計算で12%だ。どっちが大きくなるかといったら、複利計算12%のほうがはるかに大きくなるに決まっていますよね。だからあと10年もしないうちに日本の3倍くらいになって、アメリカも追いつき追い越されちゃう。これが今の現実です。したがって、いかに日本が経済の成長力を回復するか。成長率、名目4%成長というのはゴールデンルールなのです。4%以上の成長を達成しなかったら間違いなく日本はつぶれます。ですから世界の先進国はこの10年間どこの国でも平均すると4.3%、これが世界の現実なのです。やればできることをなぜやらないのか。

(5) 経済力と同時に大切なことは政治力なのです。政治力というのはイコール外交力なのです。ここにおいて試されるのは先ほど来申し上げている政治家の反射神経なのです。だからこういう反射神経を研ぎ澄ますための政治的な安定性、これも力の均衡の背景にある話です。

(6)そして文化力です。この文化力、日本のソフトパワー、これは非常に大事であります。そういうことをバランス・オブ・パワーの概念として、日本がこういう総合力で中国に負けないよ。足らざる部分は日米同盟で補っていきますよということをやれば、覇権主義・中華思想に対して力の均衡という観点から抑止力が働いていくようになるんですよ。だから中国もこれだけグローバル化すれば、そう勝手なことはできなくなる。レアアースを日本だけ禁輸をする。そんなことをやったら世界中から除け者になります。

(7)だからそういうことをやりながら、やっぱり私の親父が考えていたことですね。これは中国 13 億の民、その周辺には ASEAN(東南アジア諸国連合)6 億 5000 万の民がいる。まずこの ASEAN の各国と連携していこうというので、インドシナの不安定要因を取り除く作業から始まったわけですよ。だからインドネシアからベトナムに行き、ベトナムからカンボジアに行くと。こういう外交をやって、そして朝鮮半島のトゲを取り除くために一番最後にやったのは北朝鮮外交でした。だからこの中国の周辺国家、インドとか、モンゴルとか、中央アジア、私の親父はキルギスに行った一番最初の外務大臣ですけれども、こういう中国の周辺国家との連携プレーで、まず EPA(経済連携協定)、FTA(自由貿易協定)をこういうところからどんどんやっていこうということを考えていたのです。残念ながらうちの親父が死んだ後は中国がワーストと攻めてきて、FTA もどんどん先を越されてしまっていますけれども、でも、今からでも遅くはないですね。こういうバランス・オブ・パワー、多角的「力の均衡」体系を作っていくというなかで中国の覇権主義を抑止するという事は間違いなく可能になります。

(8)だいたい日本のソフトパワーというのは相当優れものがあるのですね。だから例えばある雑誌の編集者が言っていましたけれども、「渡辺さん、今、中国共産党の幹部の間で読まれているベストセラーって知ってますか」「えっ、何ですか」「それは渡辺淳一さんの『失樂園』ですよ」「渡辺淳一さんて、あの作家ですか」「そうです。渡辺淳一さんが中国で何と呼ばれているかご存知ですか」「ドゥビエンですか」「違います。“恋愛の毛沢東”と呼ばれているんです」なるほどそうか、日本のソフトパワーはすごいなあ、というのが結論でございます。

P53 ~ 59

[コメント]

政治とは何か、その政治を担う政治家が何を考えているかを知るには新聞を読んでいるだけではわからないことが、この対談でよくわかる。この渡辺喜美氏をはじめ政治家は、日本国の将来のために、日本国民の生存のために、国とは何か、国民の幸福とは何かを、1 年 365 日、1 日 24 時間心の底から考え続けている。時間があつたら政治家の話をじっくり聞いたり、話したり、書いたものを腰を落ち着かせて読むとよい勉強になる。党首となった渡辺喜美氏の本音の対談集は実に参考になる。

- 2010 年 10 月 17 日林 明夫記 -